

叢談

カードの世紀

第210回

「信用」を生んだ人を探して

ささのおつじろう 篠野乙次郎さんのこと (続編)

櫻井 澄夫

クレジットを信用と
訳した篠野さん

この連載を毎月ご覧いただいている方にはご記憶があるかもしれないが、この連載の第147回(2017年8月)に、『カレイライズ』と『CREDIT信用』——篠野乙次郎さんのこと』と題する一文を書いたことがある。

古くから使用されている「信用」という言葉は、「消費者信用」「販売信用」というような用語として使われているが、「クレジットカード」の「クレジット」とは、日本語にある「信用」「信頼」というような言葉と同義であるかのように説かれ、広く流布し、信じられている説明は間違いであることに気が付き、それを論証しようとしたものだ。なくなってしまったが、日本長期信用銀行の名も、もともと長期にわたって信用するという意味ではないだろう。

「クレジットの丸井」も、従来の「月賦の丸井」から言葉の上でもイメージチェンジを図ったブランド戦略だろうから、「信用の丸井」という意味ではなからう。信用の意味なら誰が誰を信用するのか、意味が通らない。長銀の場合も中国語ではこういう銀行を長期信用銀行とは呼ばず、長期信託銀行とも呼ぶのが普通だろう。「長期信用」では意味が通じにくい。信託とは信託のことだ。

私が間違いに気付いたのは、語彙史について詳しい英語や国語の辞書中の記載事項に教えられたからである。「Credit」にはOED(オックスフォード英語大辞典)のような権威ある大部の英語辞書においても、十いくつの意味があり、これらを検討することなしに日本語の「信用」や「信頼」にそのまま置き換えると意味が通らなくなる。

クレジットカードとは、「個人の信用をもとに発行される、

まるといことになる。

本稿を読む方には、ぜひ、第149回の拙稿をお読みいただきたい。

クレジットは

「信用」「名誉」「債権」

私は「Credit」が「信用」と

訳された事情を、明治期に大量に誕生したいわゆる和製漢語、つまり英語などの西洋語の日本の漢語への翻訳の中に見出したいと考えた。そして、1900(明治33)年に篠野さんによ

って書かれた辞書である『英和外交商業字彙』(三省堂刊)のこの本の表紙は二重になっている、表の表紙は英語(画像1)、内側の表紙は漢字(画像2)で書かれている)の中で、「Credit」が「信用、名誉、債権」という意味であると書かれていたことを知った。

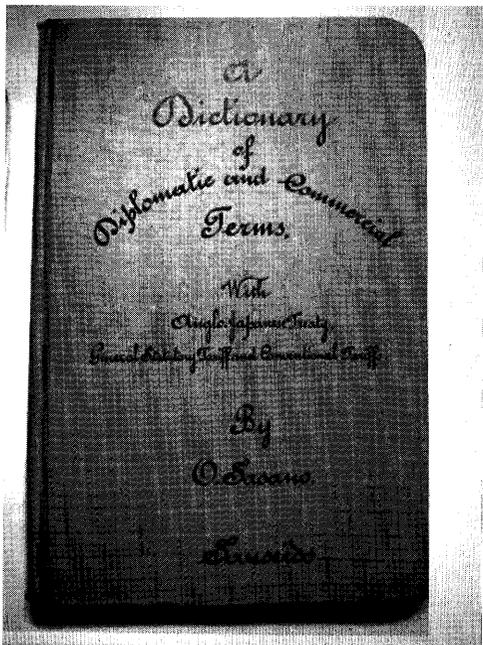
現在最も大きな国語辞典である『日本国語大辞典』(小学館)通称「日国」は、「信用」について、「信用」(英)Creditの訳語。一方の給付がなされたあ

と、一定期間後に必ず反対給付がなされるという経済上の信託」と説明しており、篠野さんが掲げたこの三つの中では「債権」が最も近いと考えられよう。

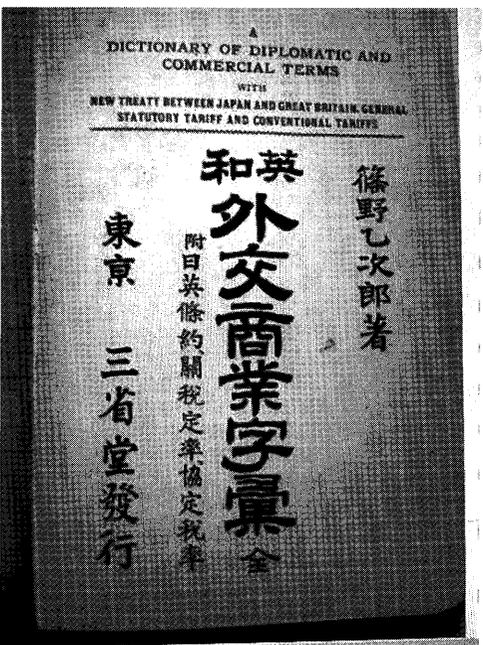
日国の記述は、OEDの「Credit」の語釈を受けたものであり、その二つをつなぐのが篠野さんの著書であるわけだ。

篠野さんはその緒言に、「使用する語彙に対し成るべく一定の訳語を用ゆることに致したしとの希望を以て執務の側ら最も

▶『英和外交商業字彙』。(画像1)



▶『英和外交商業字彙』。(画像2)



普通に使用したるものなり」「外交若くは商業の事項に限りたるものなり」と記しているが、明治の中期になって和製漢語が増加してきたが、整理されていない実情を見て、それらを標準化する必要を感じ、整理しつつ、命名するに至ったものだろう。

従って同書は編さん、出版の目的が明確で、後述するように海外勤務経験も豊富な篠野さんの経歴ならでは作品であり、今でも評価が高いのは十分に故あることであろう。

私は本誌に書いた前の文章で、「写真を探している。所在をご存じの方があつたら、ご教示願いたい」と書いたが、全く反応はなかった。私は篠野さんと関係があつたとおぼしき書籍などをいくつも探してはみたが、なかなか目的は果たせなかつた。

しかし、つい最近になって、ようやく篠野乙次郎さんの写真を目にする事ができたので、前回の文章を補強すると同時に、篠野さんの写真の印刷されている書籍に関してご報告して、将来の研究者のご参考に供したい。

やっと探し当てた 篠野乙次郎さんの写真

「正5位、勲3等、東京府平民、大使館1等書記官。慶應2年(1866年)11月21日生まれ。永原俊章(小田原藩士)の2男。岡山県の士族の篠野憲令の娘の八重と結婚して養子になつた」。

長女雪枝は陸軍少将西郷豊彦の妻、豊彦は西郷従道の子。従道は西郷隆盛の弟で初代の海軍大臣だ。篠野は出世すると同時に閩閩も育てていったのだらう。

1889(明治22)年、第一高等中学の教諭、1890(明治23)年教授、1895(明治28)年外務省翻譯官、公使館1等書記官、公使館3等書記官、大使館1等書記官、1900(明治33)年2等書記官兼領事としてシヤム(今のタイ)に在勤、1908(明治41)年外務大臣秘書官、1911(明治44)年イタリア勤務、そして大使館1等書記官としてドイツに駐在、帰国後外務省勤務した。

これまで篠野さんの経歴はネットなどさまざまな手段を使用して調べてきた。

どのような人が、「信用」という明治期の新たな用語とその定義を作つたのか、私はかつて本誌で、「Credit Card」の初期の日本語訳の探索を行ったことがあるが、その流れでの調査でもあつた。

すると篠野さんの写真は、『鉄道50年』(京阪電気鉄道出版、1960年12月)の1906(明治39)年11月19日から1936(昭和11)年3月31日までの元取締役の写真と経歴の一覧の中にあつた。

篠野氏は1918(大正7)年に同社取締役就任。1921(大正10)年に創立の系列の生駒電鉄の社長になつている。篠野さんの顔立ちには、目は大きく、しっかりした感じだ。外国人を相手にしても対等にやりあえそうだ。

京阪電気鉄道に転載の許諾を

ここまでが篠野さんの明治末年までの大体の経歴だが、その後の細かな経歴を書いたものにはまだ行き当たらないし、学歴がよく分からない。

しかし、篠野さんの経歴と多数の著書を年代別に見ていくと、どこで何をしていた時にどんな本を出したかが、見えてくる。予想した以上に経歴と著作が歩調を合せているのだ。

『内地雑居交際の心得』(金玉堂)と、『洋食独案内』(リュシー・スチーブン述。篠野編)、『英和実用対話』を出したのは1886(明治19)年で篠野さんはまだ20歳だった。学生だったのか。洋食の本など出しているが、外国人からの聞き書きのようなだし、他の本も海外経験というより、「外国事情」を簡単に述べたような本だ。

英語の教師としては、西洋料理の紹介本などは、手を付けやすい内容だったのかもしれない。

お願いしたが、残念ながら同社の広報からのご返事は、「古い資料なので、写真の所有者や当時の掲載の経緯が分からないので、許諾の返事ができない」ということだった。

ただ、この本は、各地の図書館で見ることが出来る。東京の国会図書館はもちろん、わが家の近所では横浜市立中央図書館、横浜市立大学図書館、神奈川大学図書館にもある。複数の古書店でこの本が売られていることも知つた。探し当ててみると、そう珍しい本ではない。

社史の類は、会社の立派な業績を印刷物で残すためのもので、出版の経緯などは自明であろう。そこに掲載された歴代の役員の写真を用いることに、何の問題があるのだろうか。原稿は残っていないとしても会社が撮影した写真だろう。怪しい内容の写真ではない。個人情報というより、公開情報だろう。社長や役員になつた人が、他

の分野でも名を残したことが社会で紹介されることを拒む必要があるのか。社史を編集したことがある私には理解できない。従って、ご興味がある方は、あちこちの図書館に所蔵されているこの社史をご覧になっていただきたい。

なお、篠野さんの実父の永原俊章さんの写真は国会図書館のデジタルアーカイブで見ることが出来ることを付け加えておきたい。

小田原藩士だったということだが、先祖は名前からしてそれ以前は今の滋賀県出身かもしれない。

篠野さんは どういう人か?

さて、篠野乙次郎さんはどういった人物か。時間をかければもっと資料は集まるだろうが、1915(大正4)年の人事興信録第4版を調べて抜き書きしておこう。

カード決済業務のすべて

ペイメントサービスの仕組みとルール

山本正行 [編著] A5判・172頁・定価2,200円(税込)

カード決済の実務が初めてわかった!!

これまで案外知られていなかった、クレジットカードやデビットカードなどの決済の仕組みを初めて解明した入門書。

第1章 決済カード業務の概要と実務

1-1 カードビジネスの仕組み/1-2 イシューング業務/1-3 アクワイアリング(加盟店)業務

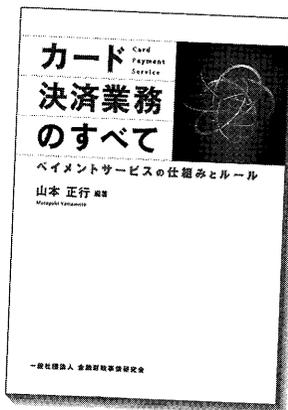
第2章 カード決済ネットワークの概要と実務

2-1 国際ブランドの仕組みと運営/2-2 国際ブランドルール/2-3 国際ブランドプロダクツ/2-4 国際間の決済ネットワーク/2-5 国際ブランドを支える決済ネットワーク/2-6 国内の決済ネットワーク/2-7 決済実務の概要

第3章 金融決済用ICカード

3-1 ICカードの概要/3-2 EMVとセキュリティ/3-3 少額決済スキーム

クレジットカード会社やシステムベンダーなどの実務家はもちろん、消費者相談に携わる弁護士、相談員、アドバイザーにお勧め。



一般社団法人 金融財政事情研究会 申込先 〒160-8519 東京都新宿区南元町1-9 電話(03)3358-2891(直通) FAX(03)3358-0037

教師を辞めて外務省に入つて
すぐの1896(明治29)年に
斎藤秀三郎と共著で『English
Composition for Beginners on
the Conversational Method』
(興文社)という本を出版して
いる。

この時に篠野さんは30歳。年
配の人はご存じだろうが、共著
者の斎藤さんは英語の教育界で
は非常に有名な学者だった。辞
書も作っている。その人と二人
で本を書いたのだから、斎藤さ
んに刺激を受け、また実力が認
められ、教師から外務省への転
勤が可能になったのであろう。
この本は古書としてかなり出て
おり、入手は難しくない。

なお、今回調べてみると斎藤
さんと篠野さんは同年である。
斎藤さんは23歳で名門の一流の
教授になっている。斎藤さんの
活躍などを見て、篠野さんは一
介の中学教師に飽き足らなくな
ったのか。執筆と外交官として
の生活に自分の道を見つけたの

だろう。こうした一流の学者と
の交流が、篠野さんの書いた本
に深みや説得力を与えているの
は間違いないだろう。

1900(明治33)年は篠野
さんがシヤムに転勤した年だか
ら、いよいよ外国経験を重ねた
ことになる。シヤムは初めての
外国勤務か。この歳に『英語会
話実用書』という本を出した。
1900(明治33)年といえ
ば、本稿の主題の『英和外交商
業字彙』が出た年だ。外務省に
入つて5年の若く元気な青年の
やりそうなことだ。こうした辞
書の発想や経験は、斎藤さんと
編集した本から学んだ部分もあ
らう。

外務省を辞めて 実業界に入る

1910(明治43)年に篠野
さんはあの外務大臣の小村寿太
郎の秘書官を務めていたという
記録があるから、この後あたり
に外務省を辞めて実業界に入っ

たものと思われる。

1918(大正7)年に52歳
で京阪電気鉄道の取締役。19
21(大正10)年に生駒電気鉄
道の社長になった。同和鋳業の
監査役にも就いている(191
7(大正6)年)。

実業界に入つても、「どうす
れば英語の試験に合格するか」
(1919(大正8)年)、「英
語の学び方」(1918(大正
7)年)というような文章を本
に載せている。「いくつになっ
ても英語の勉強はやめられな
い。教師もやめられない」とい
う感じだ。

その後の篠野さんの経歴は不
明だ。ある資料には「unkno
wn」と出ている。引退された
のか。

もし篠野さんが いなかったら

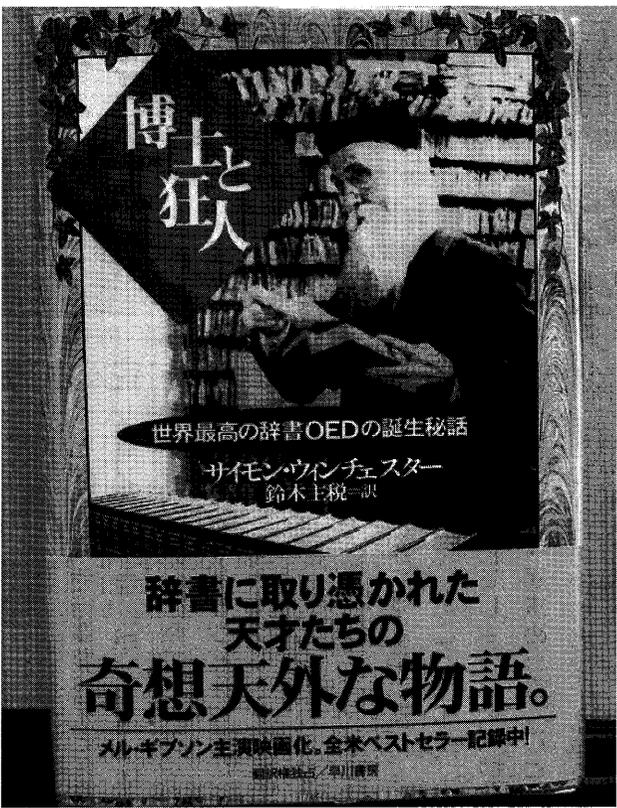
さて、今回のテーマの主役は
誰だろう。最初は「Credit」が
主役だったはずだ。そのうち

るのが、私の考えだ。

OEDについて 学習する

私の文章でしばしば登場する
OEDについては、いい本がい
くつか出ている。サイモン・ウ
インチェスター著、鈴木主税訳
の『博士と狂人——世界最高の
辞書OEDの誕生秘話』(早川
書房。1999年。画像3)、

アモン・シェイ著、田村幸誠訳
『そして僕はOEDを読んだ』
(三省堂)が代表例だ。前者は
英語の辞書に対する関心とある
程度の知識がないと読みにくい
が、OEDの誕生の事情がよく
分かるし、後者は「21730
ページの『OED』を読みとお
した男の物語」という紹介があ
るように、読みやすいので、こ
の類いまれな辞書の中身に近づ



▶『博士と狂人』の表紙。(画像3)

くことができるだろう。

また、『博士と狂人』は、私
は見えないが、メル・ギブソ
ン主演の映画になっているそう
だ。最近のこの連載で、日本の
国語辞典について書いた本につ
いては、かなり書名をあげてご
紹介した。

私が最後にいいたいことは、
小型、中型の辞書もいいが、や
はり社員が何千人もいるような
企業では、OEDや日国くらい
は備えて仕事に活用すべきであ
るといふことだ。

OEDと日国を眺めてみる
と、日国のような大きな辞書は
OEDに多くを学んでいること
が分かる。実際に比較してみる
と、それがよく分かるのだ。

また、こうした大型の辞書は
近年、オンラインやCDなどで
も利用できるようになってきて
おり、利用しやすくなつてき
た。また小型、中型の辞書も新
版が出ると古い版はかなり安く
販売される。こうしたものから

に、この言葉を和製漢語にした
篠野さんが主役になつていつ
た。こうした言葉が、今のよう
な形で広まったのは、一人の人
間の意思がそうさせたと思ひ始
めた。

本誌の「月刊消費者信用」だ
つて篠野さんがいなかったら、
別の名前になつていたかもしれ
ない。多くの日本における「信
用」や「クレジット」は語形を
変えていたかもしれない。

もっと有名な人が関わった和製
漢語、例えば「演説」は福沢諭
吉による造語だというようなこ
とは比較的によく知られてい
る。

しかし、事が本誌の読者の業
務に関わる場合は、人任せにし
ていては真実の追究はできな
い。そうした問題は、OEDや
日国の編者に全てを委ねるわけ
にはいかないというのが、私の
基本的な姿勢だ。

また、そうした基礎的な知識
を業界関係者は持つべきだとす

入っていくのもいいだろう。

そして、顧客相手の文章やサ
イトを担当している人は、もつ
と言葉に敏感であるべきで、こ
うした語彙を歴史的に説明して
いる大型辞書には常識を超越し
た価値が詰まっているから読み
物として読んでみるといった楽
しみ方をする、「発見」がある
だろう。

『英和外交商業字彙』のよう
な堅い本だけではなく、篠野さ
んの会話の本や、交際の本、料
理の本などを眺めて、このユニ
ークな人物のことを知るのも一
興だろう。

第147回では篠野さんの料
理の本に出てくる「カレイライ
ス」に触れたが、こうしたこと
にまで関心を持つて著述する篠
野乙次郎さんという男の存在を
知ると、明治という時代への別
の関心がわいてくるかもしれな
い。

「Credit」から「信用」はこ
うして生まれた。